「高田博厚と出会う」

高　橋　　純

以下に紹介するのは、2017年6月17日に埼玉県東松山市の市民活動センターで行われた筆者の講演の全文である。

東松山市の高坂駅西口から延びるメインストリートは「高坂彫刻プロムナード」と呼ばれ、その両側の歩道は彫刻家高田博厚(1900-1987)の作品32点で飾られている。この彫刻プロムナードについて現東松山市教育長中村幸一氏はこう伝えている、「東松山市と高田博厚氏との関わりは、先の教育長田口弘が高坂西口土地区画整理事業の完成記念にと、高田博厚氏に作品を依頼したことから始まります。つまり、東武東上線高坂駅西口から延びる「高坂彫刻プロムナード」に氏の作品が設置されてからということになりますが、この関わりもまた三十年をへようとしています。彫刻の置かれた当時の鮮烈な印象は今も色褪せることなく、三十年を経てなお薫るほどの美しさをありのままに放っております。彫刻通りと呼ばれる通りは、全国に数多く例がございますが、ただ一人の作家の作品で統一された通りというのは非常に稀で、全国に誇るべき大切な市の財産となっております。」

2017年は高田の没後30年の節目にあたることから、その命日ともなる6月17日に合わせ、芸術家高田博厚の功績を顕彰すべく、「思索の灯」と銘打って講演とコンサートで構成されるイベントが催された。筆者の講演はその一環として行われたものである。

「高田博厚と出会う」

皆さんこんにちは。ただいまご紹介に与りました高橋純です。

これから皆様に、高田博厚と私の出会いの顛末をお話しすることで、ここ東松山市の彫刻プロムナードを飾る作品群の作者をよりよく理解していただく切っ掛けになれば良いなと期待しているのですが、実は私はこの人物に生前直接お目にかかったことはありません。また高田は1900年生まれなのに対して、私は今世紀になるまで彼の良き読者・鑑賞者であったわけでもないのです。高田博厚について、永らく私は、フランス経験の長かった著名な彫刻家という程度の認識しか持っていなかったと言っても過言ではありません。ではどうして私が高田と出会うことになったのかと言えば、奇妙に聞こえるかもしれませんが、私が北海道の小樽商科大学でフランス語とフランス文学の教鞭をとる教師であったからこそなのだと思っているのです。

高田は小樽商科大学とは縁もゆかりもないのですが、この大学の前身は小樽高等商業学校といって、かのプロレタリア作家小林多喜二の出身校です。小林多喜二と言えば、10年程前、2008年あたりに、憂うべき格差拡大の日本の社会状況を反映して、その80年も前に書かれた多喜二の『蟹工船』ブームが巻き起こったことを皆さんご記憶でしょう。ちょうどそのころのことです。私は、多喜二研究者でもある歴史学の先生からこう尋ねられました。「多喜二は当時の軍国主義

政権による思想弾圧の犠牲者となって1933年２月20日に亡くなったのだが、このことを知ったロマン・ロランが抗議の追悼文を書いて、これがフランス共産党の機関紙「ユマニテ」に掲載されているという話がいつのころからか日本で語り伝えられているのですが、それは事実なのでしょうか」という質問だったのです。このことについてまったく無知だった私はびっくり仰天でした。それが本当ならば、当時すでに多喜二の存在を知っていたロマン・ロランもすごいし、そこまで知られるほど多喜二も偉大な存在だったということだからです。しかし、待てよ、という疑念も生じました。もしもこれが本当の話だとしたら、私がこの伝説的エピソードを耳にしたときすでに75年が経過していた昔のことなのに、これほど重大な出来事の真偽がなぜ今まで判明せずに来たのだろう、という当然誰もが抱きそうな疑念です。これは眉に唾して聞かなければならない都市伝説のようなものです。きっとこれまでにも、ロマン・ロラン研究者や小林多喜二研究者の中には、この噂を聞いて自ら確かめようと取り組んでみたけれど、果たせなかったという人もいることだろう。真偽の結論が出せなかったままなので、『蟹工船』ブーム再来と共に蘇ってきた、多喜二にまつわる都市伝説と言えるでしょう。私は世にいくらもいるフランス語の教師の一人ですが、その私が多喜二の読者でもあり、加えて多喜二の母校小樽商科大学の教師でもあるという偶然が重なっていなかったら、きっと私もこんな胡散臭い都市伝説にかかわろうとはしなかったことでしょう。

ロマン・ロランの抗議文が掲載された新聞の名前が明言されているならば、その新聞を見れば真偽は判然とするはずです。なのにそれをしないとしたら、どんな理由をつけようとも、フランス語の教師という立場にあっては怠慢と無能の誹りをまぬかれないでしょう。その一点において私はもう知らんぷりできないなと感じ、ムキになってしまいました。

もう一つ私がこの伝説の真偽にこだわった理由があります。少し調べてみると、多喜二について語られる様々な場面でロマン・ロランの抗議文への言及が見られはしましたが、いずれもが伝聞・仄聞の形でふれられているのみで、抗議文自体は目にすることはできませんでした。それでも中には、「抗議文を実際に読んだことがあるというフランス人研究者から聞いた話だから、それは存在するに違いない」と主張する人もいました。しかしこのように、これまで誰も目にしたことがないにもかかわらず、その抗議文の存在を既定の事実であるかのように語っていては、それは歴史の真実をゆがめることになってしまいます。要するに私は、「ロマン・ロランは偉大なノーベル賞作家である。そしてロマン・ロランは多喜二の死を悼んで抗議文を書いた。ゆえに多喜二は偉大な作家である。」といったようないかがわしい三段論法はまっとうな文学理解・作品理解をもたらしはしないし、こういうかたちでロマン・ロランと小林多喜二を安易に結び付けるのは両者に対して失礼なことではないかと考えたのです。これが、私がこの抗議文伝説の真偽にこだわってしまった理由です。

そこで、最初にとりかかった検証作業はフランスの新聞「ユマニテ」の閲覧です。多喜二の命日は1993年２月20日なので、同年のそれ以降のユマニテ紙をくまなく読み返していきます。すると３月14日版第４面に、日本の警察権力による多喜二殺害を報じる記事が見つかりました。しかしこれは「ユマニテ」の特派員報告に基づいて書かれた報道記事であってロマン・ロランが書いた抗議文ではないのです。すると問題の抗議文はその後に書かれた可能性がある、ということで、この年の大晦日まで新聞をめくって行きましたがそれらしいものがまだ出てきません。それでもこれで絶対にないとは言い切れないとなれば次の年のユマニテを見る必要がある。そこでさらに1934年のバックナンバーを１年分すべて閲覧しましたが出てきません。これだけ探しても

出てこないのだから、あの抗議文の話は嘘だったのか、と言うと、「絶対に存在しない」という証明にはなっていない。これが本当の「悪魔の証明」というものです。どこまで行っても「絶対ない」とは言い切れないのですが、私はひとまず翌1935年８月15日でバックナンバーの閲覧を止めました。これにはわけがあります。

ユマニテのバックナンバーを閲覧している間に、「伝説」の出どころを探っていて、私は高田博厚の回想録『分水嶺』に出会ったのです。そしてその回想録を読んで、件のロマン・ロランの抗議文がもしも存在するとしても、この日付より後に現れることはないだろうと推理したのです。この1935年８月15日というのはフランスの新印象派の画家ポール・シニャックの命日なのです。高田の証言によれば、この人のアドバイスを受けて高田はロマン・ロランに日本の非合法新聞の記事をユマニテに掲載できないだろうかと相談したことになっていたからです。つまりそういう相談はポール・シニャックの死後にはありえなかったはずだというわけです。

そこでこの高田の回想録『分水嶺』の話となります。高田は1990年生まれ。31歳でフランスに渡り、途中一度も帰国することなく26年間、ほぼ全期間にわたってフランスに暮らし、1957年に帰国して彫刻家の活動を続け、1987年に亡くなりました。『分水嶺』は1974年に雑誌『世界』に連載され翌年に単行本になりました。今は岩波現代文庫の一冊となっていて現在でも読むことができます。そしてその内容はこの文庫本のカバーでこう紹介されています。

「三十年に及ぶヨーロッパの激動期を生きぬいてきた芸術家の赤裸々な記録。大戦前夜の暗い谷間の時代、レジスタンス、解放、波瀾の現代史を背景に、ロマン・ロラン、アラン、ガンジーらの知識人との親交、多くのパリに住む日本人の生態等が、幾多の「分水嶺」を経た著者のもつ鋭い感性と詩情あふれる筆で克明に描かれる。」

自伝や回想録といった作者が自分の生き様を語る文章というものは、作者に対する読者の思い込みや思い入れの相違によってさまざまに異なる受け取られ方をするものです。『分水嶺』についてのその一例として、作家の小谷野敦さんはこう述べています。

「1974-75年に『世界』に連載されたものだが、戦間期パリを舞台にいろんな人が出てくるし、また女たらしでよく女と出会っては寝ている。」

これだけなのですが、長きに渡ってパリに暮らした高田は実に多くの人物との出会いがありましたから、こういう受け取り方もされるのかもしれません。

もう一つは加藤周一さんのものです。加藤さんは、1984年に４巻本で刊行された高田博厚著作集のうちの第一巻の解説を担当し、その中で『分水嶺』の一節を引用してたたえているのですが、実はこの回想録は氏が担当した第一巻には入っていないのです。それでもなおこれについて語りたかったのでしょう。それほどの思い入れがあったということなのです。

1931年12月にロマン・ロランとマハトマ・ガンジーがスイスで１週間にわたって語り合いながら過ごした時、終始その傍らで過ごすことを許された高田が、二人の偉人に比べて自分の存在がいかに貧しいことかと嘆き悲しみつつパリに帰った時のことでした。夜通しパリでやけ酒を煽って翌朝郊外の自宅近くの知り合いの家に立ち寄った時、

「彼女は大きな茶椀に熱い牛乳入りのカフェを一杯満たして、クロワッサンと共に朝食を用意してくれた。徹夜の酒で頭の奥がじんじんし、手がふるえて、むさぼり食う私を、彼女はだまって眺めていた。「あなた、どうしてそんな馬鹿をなさるの？　理由もないのに……」つぶやくように言った。急に涙がこぼれそうになったので、私は茶椀をそっと卓に置き、だまって彼女の手をとった。私の悲しみは彼女には言えない。私はこの若い美しい女をクラマールに移ると同時に愛

していたのであった。行く先のない愛情であることを知りながら。そうして私には、スイスでのガンディーやロランとの一週間と、彼女のところでの朝食が、今日でも同じ重さで対比している。」

そして加藤周一さんは、その最後の一文だけですでにして見事な文学作品であり、「その1行には、一人の人間のもっとも深く、もっとも美しい部分が、要約されている」と絶賛しているのです。

では私はこの回想録をどう受け止めたかをお話ししなければなりません。私にとっては高田が語っている多喜二についての話が本当か嘘かが一番の問題でした。これについて高田はわずか1ページですが明快に語っています。

いつのことか記憶は定かでないが、ある時日本から差出人不明の小包が届き、開けてみると中には、小林多喜二殺害を告発する記事の載った非合法新聞と、この非道を世界に知らせるべく「ユマニテ」に記事を載せてほしいと頼む手紙が同封されていた。どうしたものかと思案しつつその新聞を手にして電車に乗ったら、パリに来たばかりの日本人と出くわし、それが嬉野満州雄だと後で知った。それからポール・シニャックに話したら、スイスのロマン・ロランに相談しろと言われて直ちに手紙を出した。するとロランがすぐに自分が引き受けるという返事をくれ、「ユマニテ」も協力してくれて、間もなく「ユマニテ」第一面にロランの抗議文と小林の遺体の写真が掲載された。このように高田は語っているのです。

ところがこの話は最初に雑誌に連載された時にすぐに嘘、あるいは記憶間違いが指摘されたのです。(戦後日本で著名な国際問題評論家として活躍した) 嬉野満州雄がパリにやって来たのは1932年の夏だったのです。ならばパリに来たばかりの嬉野と遭遇した高田がその時に読んでいた日本の新聞に、その翌年の2月にに死ぬことになる多喜二殺害の記事が載っていたはずがないのです。すると高田はこの指摘は正しい、自分はきっと記憶違いをしていたのだと認めたのです。(しかし回想録を単行本にまとめた時に高田は、この記憶間違いは認めながらも、回想録は自分のためだけにしたためたものだからそのつもりで読んでほしいと断ったうえで、このエピソードに一語の修正も訂正も加えずに残したのでした。)

となると「ロマン・ロランが書いた多喜二殺害抗議文」の真偽にかかわる私の検証作業はここで終了です。しかしそうすると、この「抗議文伝説」は偽物だということになり、そしてその出所は高田博厚であるわけだから、それが故意の作り話か、単なる記憶違いから生じた思い込みかはともかく、高田の言ったことは嘘だったと結論づけなければなりません。しかし私はこの結論にどうしても納得できませんでした。その理由は、まさに「文は人なり」と言われるように、高田の文章の質にあります。『分水嶺』の一読者としての私の感想は、先にお伝えした加藤周一さんに与するものであり、その高田のような人物が、自己顕示欲に駆られてありもしない手柄話を語ったりはしないだろうと思い、また、高田ならば、いくら記憶違いのミスはあろうとも、自ら生きた経験の裏付けのない嘘はつかないはずだとおもわれたからです。それゆえに私のこだわりは続いたのです。

そこで今度は小林多喜二の名前を伏せて高田の記述をたどり直すと、嬉野満州雄に初めて出会った1932年に高田はロマン・ロランに何かを頼み、その結果が「ユマニテ」の紙面に現れたことになります。そこで私はこの新聞のバックナンバーの閲覧を多喜二の死からさかのぼるかたちで再開しました。そしてついに1932年9月29日のユマニテ第一面の記事を発見するに至ったのです。そこでは、ロマン・ロランが当時のフランス共産党党首マルセル・カシャンに対して、日

本から届いたある知らせを「ユマニテ」に掲載してほしいと依頼する手紙が紹介され、それに続いて、日本で弾圧されたプロレタリアートの窮状を全世界に訴える長文のアピールが展開されているのです。小林多喜二がなくなるのはこの5か月後です。私はこれが、高田の記憶違いの背後にあった本物のエピソードなのだと確信しました。しかしこの記事の中には当然ながら高田の名前は出てきません。なぜなら、ロマン・ロランに届けられた知らせの情報源が明かされたならば、その情報源である高田は、(当時は日本の同盟国であったフランスで) 日本の非合法活動を支援した廉で即刻日本への強制送還・逮捕となってしまうからです。しかし高田の名前がどこにも出てこないとなれば、この記事の出現に至る経緯についての私の推論　そのものが一つのフィクションではないかと疑われても仕方ありません。

そこで私は自分の推測が当たっていることを証明するために、そして何よりも、高田とロマン・ロランの交流がいかに本物であったかを証明するために、何らかの物的証拠を見つけ出したいと考えました。高田は、戦争末期の混乱の中でベルリンに移動させられた後、ロマン・ロランからもらった手紙を含む、アトリエに残したすべての所持品を没収され、戦後パリにもどってからも手紙類は一切返してくれなかったと証言しています。しかし他方、パリの国立図書館にはロマン・ロランの死後残された未公開の日記・手紙が保管されていると言います。その手紙は膨大な数にのぼり、1通のみの送り主もいれば１００通以上に上る手紙の送り主もあり、差出人の総数が2000をはるかに超えるのです。だから、ロマン・ロランから高田に送られた手紙は失われてしまったかもしれないが、高田がロマン・ロランに送った手紙はその中に紛れている可能性がある。そしていまだ公開されていない日記の中にも高田との交流の実相を知る手掛かりが見つかるかもしれない。というわけで私はパリに行きました。

そこで目にすることができたロマン・ロラン直筆のフランス語を解読するのは実に骨が折れましたが、期待以上の成果を挙げることができました。未公開の日記の中からはこれまでに知られていなかったロマン・ロランの高田に対する直接的な評価がしるされており、その肉声の一端は今日のこの後のコンサートの中の朗読を通して聴いていただけるでしょう。書簡について言うならば、予想通り、高田がロマン・ロランに宛てた手紙は14通見つけることができました。さらに、これは全く予想も期待もしていなかったことですが、なんとロマン・ロランが高田に宛てた手紙が９通見つかったのです。こちらは、戦争末期の混乱状態で高田から没収された私物の中にあったはずのものですが、戦後も高田の手に戻されることなく、高田は永遠に失われてしまったと惜しんでいたものなのです。それがなぜパリの国立図書館に保管されるに至ったのかは誰にも正しく説明できません。今はただ推測するだけですが、おそらくは、没収された高田の所持品を調べたフランス人官吏が（その時点ではロマン・ロランはすでに故人となっていたはずなのですが）その中に、フランスの国民的大作家である「ロマン・ロラン」と署名された書簡を見つけて、これを貴重な歴史的文書と見て国立図書館に届けたのではないかと想像されるのです。

ロマン・ロランと高田がそれぞれ相手に送ったこれらの手紙は、1931年に高田がフランスに渡ってから、ロマン・ロランが亡くなる1944年にかけての二人の交流の真実を伝える往復書簡集を構成しています。その一つを読んでお聞かせしたいと思います。

これは1932年９月23日付けで高田に宛てられたロマン・ロランの手紙です。

親愛なる高田へ

ヴィルヌーヴに戻り、あなたの手紙を見つけました。

取り急ぎこれを書いています。あなたが個人として前面に出てはなりません！　あなた自身が巻き添えになるようなことをしてはなりません！　敢えてそれをすれば無用な犠牲を払う羽目に陥りかねないし、おそらくあなたにとって致命的なことになるでしょう。なぜなら、[日本政府]はあなたの生涯にわたって、国に帰る道も、家族のもとに戻る道も閉ざしてしまうだろうからです。――――　これから私自身の手で抗議文を（訳文を修正したうえで）ユマニテに送り、カシャンの支持を得て紙面に載るように計らいます。

今日のところはこの件についてこれ以上は言わずにおきます。私としては何よりも、あなたが性急にことを進めた挙句あなた自身に危害が及ぶようなことがないように願っているのです。今はもう、日本の友に書いてもよいし、知らせてもかまいません、任務は果たした、R.R.が引き受けた、と。

心をこめて、
ロマン・ロラン

この手紙が書かれた６日後に、先にお見せした「ユマニテ」の記事が出たのです。つまり、ロマン・ロランが、殺害された多喜二のために抗議文を書いたというのはやはり高田の記憶間違いだったのであって、実際にロマン・ロランの仲介により「ユマニテ」に掲載された抗議文というのはこちらの記事のことだったのが分かります。（それは、「国際プロレタリアートに訴える」という表題で1932年７月30日版の日本の非合法新聞「赤旗（せっき）」に掲載された抗議文のフランス語訳だったのです。）

もう一つご紹介します。これも高田自身が回想録の中で語っていることですが、それによると、1931年12月にマハトマ・ガンジーがロンドンからインドへの帰途、当時スイス在住のロマン・ロランを訪ねた際、ロランはあまたのパリの友人・知人を退けて、赤貧のしかも無名の彫刻家高田唯一人を、旅費を与えてまで呼び寄せたという嘘のようなエピソードがあります。これなどは回想録の中で目撃者が高田しかいないために信憑性の薄い話の最たるものでした。しかしロマン・ロランは1931年12月2日に実際にこんな手紙を高田に送っていたのです。

親愛なる高田へ

ガンジーが次ぎの日曜日にヴィルヌーヴにやってきて、金曜日の晩まで滞在します。彼とそのインド人の供の者たちに、私の持っている二つの別荘の一つを使ってもらうことにしました。

私は、多分あなたなら、ガンジーに出会って彼のクロッキーを幾つか描くことができたら嬉しいのではないかと思いました…（無論のこともしも彼が、私が期待しているように、あなたに許可してくれたらの話ですが）。

ついてはこの封筒の中に百フランス・フラン三枚を入れておきます。その心は、「できたら、日曜の夜行列車でいらっしゃい、月曜朝にはここに着きますから[ディジョン――フラーヌ――ヴァロルブ――ローザンヌ――モントルー経由で]」ということです。あなたはヴィルヌーヴのオテル・デュ・ノワジかオテル・デュ・ラックに宿をとって、ガン

ジーが発つまでの間そこにお泊まりなさい。その間５、６日のあなたの出費は私が引き受けます。（パリ―モントルー間の一週間くらいの往復切符が買えるかどうか聞いてごらんなさい。）
ただし良いですか、パリでは誰にもこのことは話してはなりません。なぜなら、どうして自分たちも招待してくれないのかとか、せめて自分をガンジーに紹介してくれないかと私を責めるに違いない人が多過ぎるからです。そして私はそんなことはしたくないし、出来ません。私は出来るだけガンジーを誰にも邪魔させたくないし、ここ数カ月のロンドン滞在で疲れきっている彼をそっと休ませてあげたいと思っているのです。

この手紙こそは、マハトマ・ガンジーがスイスのヴィルヌーヴでロマン・ロランと歴史的な対面を果たした時に、そこに立ち会うことを許されたのが高田博厚一人だったことをあかす物的証拠となるものなのです。

このように、往復書簡での二人のやり取りからは、高田が回想録の中で語った様々な経験が、嘘も誇張もなしに、高田の実体験と符合していることが分かるのです。高田は日本から遠く離れて永らくフランスに暮らす定めにあった人で、彼が語る経験談はいわば真犯人しか知りえない事実として受け取られ、その信憑性を疑う読者は少なからずいました。しかし今、世紀を越えて発見された往復書簡を対比して高田の回想録を読み直すならば、そこに浮かび上がる人物像は、決して本人が誇張したりゆがめたりした虚像ではなく、まさにその人柄を反映した等身大の人物像なのだと納得できるのです。そしてまず初め『分水嶺』の読者として高田に出会った私は、これが高田の等身大の人物像なのであれば、やはりこの芸術家は偉大な人間だったのだと改めて納得した次第です。

本日は、東松山市の皆様が、またここを訪れる方々が、折に触れあの彫刻プロムナードの作品群と行き交うときに、その作品を見る人は同時に幾分かはその作者とも出会っていることを感じていただければと願って、その作者である高田博厚について、私の知る人物像の一端をお話しさせていただきました。

ご清聴ありがとうございました。

参考文献

1．高田博厚『分水嶺』岩波現代文庫、2000
2．緒方靖夫「小林多喜二の国際的な評価」、「治安維持法と現代」2007年春季号所収、治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟刊
3．「赤旗(せっき)」1932年7月30日版
4．*Humanité,* 1932/09/29, 1933/03/14
5．*Correspondance Romain Rolland - Hiroatsu Takata,* Fonds Romain Rolland 8-1-2, 8-3-20, BNF
6．*Le Bateau-usine* (*Kanikôsen* traduit du japonais en français et présenté par Evelyne Lesigne-Audoly), éditions Yago, 2009